

自己愛的脆弱性，自我脅威状況に対する認知的評価，対処方略， ストレス反応との関連

中嶋夕湖・岡本祐子

Narcissistic vulnerability, cognitive evaluation of ego threat situation, coping strategies, and study
of stress reaction

Yuko Nakajima and Yuko Okamoto

In clinical practice, an association between narcissistic vulnerability and stress has been identified. In some recent stress studies, it is reported that the relation between personal character and stress from life event will make mental health worse. In this study, the influence of and associations among cognitive evaluation, narcissistic vulnerability, the cognitive appraisal and coping, and stress reaction were examined. A survey was administered to an undergraduate university student and 379 graduate students. A hierarchical multiple regression analysis on the resulting data, with narcissistic vulnerability, cognitive evaluation, and coping stratagem as explanatory variables and stress reaction as a response variable were performed. Narcissistic vulnerability increased the stress response. Then, the narcissistic vulnerability subtype each varies the stress reaction. In “inhibition of self-exhibition” and “covert sense of entitlement”, there are specific coping strategies which will raise or restrain stress reaction. From the above, it is important to consider coping strategies by sub types.

キーワード : Narcissistic vulnerability, cognitive evaluation of ego threat situation, coping strategies, stress reaction

問 題

自己愛と青年期

今日の社会的引こもりや学校不適応など社会問題の背景に，自己愛の問題が存在すると指摘されている (小塩，2011)。青年期は自己意識の高まりと共に，自己愛および自己愛傾向が高まる時期で

もある (上地, 2004; 相良, 2006; 小塩, 2011)。相良 (2006) によれば, 青年期には, 自己意識の高まりと共に, 自分自身を有能で優れた存在であると思いたいという願望が生じたり, 他者からの評価に過敏になったりすると指摘している。大淵 (2003) は, 思春期において自己意識が高まること, 恋愛など誇大的な自己愛を助長する経験が増えること, 将来に対する野心から誇大的な夢にふけることなどを挙げ, 青年期心理は自己愛的要素を多く持っていると言及している。そのため, この時期には大抵の人が, 多かれ少なかれ自己愛的になる (大淵, 2003)。

また, 社会的な問題において, 社会的引きこもり, 学校不適応, 自分探しなど, 幅広い問題が「自己愛」の問題として議論されている (小塩, 2011)。このような特徴を考慮すると, 青年期における自己の発達を理解する上で「自己愛」に注目することは不可欠である (相良, 2006)。

自己愛の定義

Freud, S. により『ナルシシズム入門』 (Freud, 1914 懸田・吉村訳 1969) が出版されて以降, 自己愛は本格的に精神分析的な概念・用語として用いられるに至った (Ronningstam, 2005)。Freud 以降, 精神分析学における自己愛の概念は, 様々な研究者によって拡大, 再解釈されてきた。現在, 大きな支流になっているのは Kernberg, O. と Kohut, H. の理論である (小塩, 2011)。上地 (2005) によれば, Kernberg と Kohut の理論を以下のように説明している。

Kernberg (1975) は, 自己愛性人格障害の主要な障害を「対象関係の障害と関連を持つ自己尊重の障害」としてとらえた。Kernberg (1975) の理論によると, 正常な自己愛は, 深い対象関係の能力を伴っているのである。その一方で, 病的な自己愛は, 自己概念の統合の欠如, 防衛的な自己肥大と結びついている。DSM-III (APA, 1980) の自己愛性パーソナリティ障害 (Narcissistic Personality Disorder; 以下 NPD) の診断基準は, Kernberg (1975) が示した自己愛の障害の特徴に近い。つまり, 誇大性, 自己顕示性, 他者への無関心さなどの特徴を中心として, 定式化された。その後, DSM-IV (APA, 1994) に至る間, 誇大で自己顕示的な側面に着目する研究が多く報告されてきた (上地・宮下, 1992a, 1992b; 相澤, 2006; 中山, 2008; 原田, 2008, 2009)。

他方, Kohut (1971, 水野・笠原訳 1994; 1977, 本城・笠原訳 1995) は, 自己愛性人格障害の理論は, 人々との関わりにおける特徴的な転移の分析に基づいて展開される。水野・笠原 (1994) によれば, 幼児期の発達的に正常な自己顕示を誇大自己と称した。水野・笠原 (1994) によれば, 誇大自己は親からの承認や賞賛の応答 (ミラリング) が十分に与えられると, 誇大自己から安定した自尊感情, 自尊感情調節能力, 野心的目標が形成されるが, ミラリングが不足すると, このプロセスが進行しない。その結果, 自尊感情の低さ, 自尊感情調節能力の不全, 野心的目標の欠如などが生じる。また, 幼児期に強さと平静さを備えた親を理想化し同一化するうちに, 自分でそれを行う力 (自己緩和 (self-soothing) の能力) が形成される。また, 理想化された親像から価値や理想が内在化される。親との関係の中で, 誇大自己と理想化の発達プロセスが阻害されると, 人は未熟な自己愛を脱却できず, いつまでも理想的な他者を求め続けることになる (上地・宮下, 2005)。また, 未熟な自己愛は抑圧され, それを刺激されると激しい緊張や恥が体験される (上地・宮下, 2005)。

上地・宮下 (2005) は, Kernberg (1975) と水野・笠原 (1994) の代表的なモデルの相違性を以下のように説明している。Kernberg は, 強い愛情欲求と関連した攻撃性や, 羨望を否認するために発

生する誇大自己を、自己愛の障害の本質を見た。それに対して、Kohut は、心理的安定や自己評価を維持する心理的機能の脆弱性を、自己愛の障害の本質とみなした。

自己愛の過敏性

Kernberg (1975) の提唱した自己愛障害の特徴を中心とした自己愛研究が進む中で、臨床現場で自己愛性パーソナリティ障害と診断される人々の中に、誇大性の特徴とは異なる自己愛的人格者も指摘されるようになった (中山, 2011)。原田 (2009) によれば、多くの臨床家から自己愛の過敏性の存在が指摘され始めて以降、実証研究においても過敏性への関心が増加し、過敏性のみに焦点を当てた研究や、誇大性と過敏性の両側面を取り扱う自己愛研究が行われるようになった。Gabbard (1989, 1994) は、誇大性と過敏性の2つのタイプの自己愛について整理を行っている。Gabbard (1989, 1994) は、誇大性とは傲慢で攻撃的、自己中心的、自己注目的になりやすい人々の特徴を挙げ、「無関心型 (The Oblivious Narcissist) 」とした。一方、過敏性は、他者の反応に過敏、傷つきやすさ、抑制的で内気になりやすい人々の特徴を挙げ、「過敏型 (The Hypervigilant Narcissist) 」とした。近年、一般青年などを対象とした実証研究においても、自己愛に2つのタイプを想定することが多くなり、特に国内の研究においては、このような考えが主流となりつつある (中山, 2011)。

日本では過敏型に近い事例が多いといわれ (福井, 1998)、対人恐怖、不登校、アパシーなどの問題についても過敏型と関連する特徴が指摘されている (笠原, 1984; 岡野, 1998; 清水・川邊・海塚, 2007)。これより、上地・宮下 (2005) は、過敏性・脆弱性に焦点を当て研究することの意義を言及している。

上地・宮下 (2005) は、水野・笠原 (1994)、本城・笠原 (1995) のパーソナリティ構造論に依拠しつつ、Kohut が提示している事例に見られる特徴から下記の5つの側面を自己愛の主要な特徴として抽出し、これらの側面を測定する質問紙尺度を作成した。5つの側面とは、①他者からの承認・賞賛への過敏さ (自分の発言や行動に他者からの承認・賞賛が得られるかどうかに関心があり、承認・賞賛が得られないと自尊感情が低下する)、②自己顕示の抑制 (注目を浴びたり自己を顕示したりすると強い恥体験が生じるため、自己顕示を抑制しがちになる)、③潜在的特権意識 (自分に対して他者が特別な配慮や敬意を持って接してくれることを期待し、その期待は満たされないと強い不満や怒りとして体験しやすい)、④自己緩和能力の不全 (強い不安や情動などを自分で調節・緩和する力が弱く、他者に調節・緩和してもらおうとする)、⑤目的感の希薄さ (自己を方向づける目標が希薄であり、空虚感を体験しやすい) である。上地・宮下 (2005) は、抽出された5因子を、それぞれを《承認・賞賛過敏性》、《自己顕示抑制》、《潜在的特権意識》、《自己緩和不全》、《目的感の希薄さ》と命名した。これらの因子を総称する名称として「自己愛的脆弱性 (narcissistic vulnerability) 」とした。さらに、上地・宮下 (2009) は、自己愛的脆弱性尺度 (上地・宮下, 2005) の内容を整理し、他の4下位尺度と相関が非常に低い《目的感の希薄さ》を削除し、《承認・賞賛過敏性》、《自己顕示抑制》、《潜在的特権意識》、《自己緩和不全》の自己愛的脆弱性尺度の短縮版 (以下、NVS 短縮版とする) を作成した。

以上のことから、本研究において、日本の自己愛の臨床像に近く、社会的問題の背景として取り上げられつつある自己愛の過敏さ、傷つきやすさの特徴を持つ自己愛的脆弱性に焦点を当てて検討

する。その上で、水野・笠原 (1994) , 本城・笠原 (1995) のパーソナリティ構造論に依拠し、上地・宮下 (2009) に基づき、自己愛的脆弱性を「自己愛的欲求の表出に伴う不安や、他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であること」と定義し、青年期の「自己愛的脆弱性」について検討を行う。

自己愛とストレス

ところで、現代社会においてストレスにさらされずに生きていくことは難しい。そのため、近年、性格が健康や病気に及ぼす影響について様々な研究がなされ、性格特性とストレスに対する脆弱性との関係を示唆する実証的な研究が多く報告されている (小西・山田・佐藤, 2008)。精神的な健康の問題の背景には様々な要因があるが、なかでもストレスはその大きな部分を占めている (佐久間・高橋・竹鼻・久野, 2009)。Lazarus & Folkman (1984) の心理社会的ストレスモデルによれば、ストレスの発生過程として、人はネガティブな出来事 (ストレス) を経験すると、その出来事が個人にとってどれくらい脅威的であるのか、対処できるかどうかなどの判断 (認知的評価) を行い、それに基づいて、ストレスに対処する対処行動 (コーピング) を実施する。その結果、ストレス反応が表出されるが、どのような認知的評価を行うのか、どのようなコーピングを選択するのかについては個人によって異なるため、同一のストレスを経験しても、ストレス反応は個人によって異なることが示唆されている。つまり、個々人のパーソナリティという素因によって、ストレスの認知的評価や、その後の対処行動、ストレス反応が異なってくるということが考えられる。

自己愛とストレス反応との関連において、小塩 (2004) は、自己愛人格傾向の高い者の中に、対人ネガティブライフイベントを多く経験した際、抑うつ的な感情を抱きやすいことを報告している。また、市橋 (1999) によれば、自己愛性パーソナリティ障害の患者の受診理由については、抑うつを主訴としたものが多いことを指摘している。小西他 (2008) も、自身の臨床経験から、他者評価によって自己評価が左右されやすい自己愛性パーソナリティ障害の患者は、対人関係や仕事上のストレスにさらされた結果、自己評価が一時的に低下し、抑うつ状態や感情コントロールの困難さを訴えることが多いと報告している。このように、臨床場面においても、自己愛とストレスへの脆弱性との関連性が示唆される (小西他, 2008)。

以上より、本研究では、自己愛的脆弱性の傾向と、ストレスに遭遇した場合の精神的健康への影響を検討するために、素因—ストレスモデルを用いた解明を試みたい。高野・丹野 (2009) によれば、素因—ストレスモデルとは、個人の持つ特性 (素因) と個人の経験するネガティブなライフイベント (ストレス) がお互いに影響し合った結果、抑うつ症状が生じるとするモデルである。小西他 (2008) によれば、Metalsky, Abramson, Seligman & Peterson (1982) はこのモデルを用いて、ネガティブなライフイベントによって同程度のストレスを体験しても、抑うつへの脆弱性と考えられる認知傾向を持つ人はそれを持たない人よりも、抑うつ反応を生じやすいと報告している。そこで、小西他 (2008) は、素因—ストレスモデルを用いて、自己愛人格傾向とストレスとの関連を探索的に検討している。その結果、自己愛人格傾向は、ストレスの多い状況ではストレス反応を示しやすい、すなわちストレスに脆弱な素因であると結論付けている。したがって、自己愛

人格傾向の素因があり、かつストレッサーを多く経験した場合に精神的健康度が下がるという小西他 (2008) の仮説を支持する結果となった。このことから、自己愛人格傾向の高い者のストレス耐性の低さ、ストレスに対する脆弱性が明らかとなった。

以上のことから、本研究では、小西他 (2008) に準拠し、素因—ストレスモデルを用いて自己愛的脆弱性とストレスとの関連を検討する。そこで、自己愛的脆弱性を素因と仮定し、この素因を持つ人がストレス事態に直面した際に、どのように認知的評価を行い、精神的健康 (ストレス反応) に影響するのかが検討する。

自己愛と対処方略

Stolorow (1975) は、自己愛概念の用法を概観する中で、自己愛を、「自己像がまとまりと安定性を保ち、肯定的情緒で彩られるように維持する機能」と定義している。また、Westen (1990) は、自己愛、自己中心性、自己概念、自尊感情などの概念を整理する中で、自己愛は「自己への認知的・情緒的なとらわれ」と厳密に定義すべきであると指摘している。中山 (2011) は、これらを鑑みて、自己愛の特徴として記述される様々な行動や認知、道徳性などの特徴は、自己評価 (自己像・自己概念) が脅かされた時に発動したり、自己評価が脅かされないように持続的に機能したりする、自己防衛の様式として理解できると言及している。

精神的健康と自己愛的な過敏性との関連について、中山・中谷 (2006) は、「評価過敏性」が精神的健康との負の関連を持つことを示している。また、中山・小塩 (2007) は、短期縦断的検討を行い、「評価過敏性」が3か月後の抑うつ、怒り感情を有意に予測することを示した。このことから、過敏性の高い人は、精神的健康が低いことを示し、この特徴を持つ人が、他者の評価を気にして調和的にふるまうことにより、臨床の対象となるほどの不適応状態を呈しないまでも、精神的に疲弊する傾向を持つことが予想される (中山, 2011)。これまでのところ、過敏性がどのような認知過程や行動とつながっているかという知見はほとんど蓄積されていないが、やや不適応的な自己評価維持方略と関連している可能性が示唆される (中山, 2011)。

Baumeister, Smart & Boden (1996) は、高揚された自己評価が、攻撃性などの結果を導くプロセスについて、「自己本位性脅威モデル」という理論を提唱している。モデルの中心には、「自我脅威」が据えられている。「自我脅威」とは、高揚された自己評価と他者評価のズレによって生じるものであり、自己評価を脅かす体験と同義である (中山, 2011)。このモデルでは、自我脅威の原因となった外的評価を拒否するか受け入れるかにより、攻撃に結び付くか、引きこもりに結び付くかという結果が変わってくると推定されている。このモデルに関して、中山 (2011) は新たな視点を導入している。中山 (2011) は、自己愛を「誇大型」「過敏型」を両極端にある連続体として考えているが、自己評価を維持しようとする共通要素を持った「誇大型」と「過敏型」が、異なる過程によって同じ機能を達成しようとするプロセスを提唱している。すなわち、「誇大型」は、自分の良さを誇示するなど、自己高揚的な自己評価維持と関連し、そもそもの脅威の感じにくさとも関連する。また、自己評価が低下するような場面 (自我脅威場面) に直面した場合にも、認知的・行動的な対処により、その場面自体を否定することで、自己評価の維持を達成する。一方、「過敏型」は、常に他者評価に過敏であることから、脅威自体を感じやすく、他者評価を受け入れてしまうため、自己評価を

低下させるリスクが高い。しかし、外的評価を受ける場面からそもそも退却することによって、脆弱な自己評価をなんとか維持し、回復しようとするを推測している。

そこで本研究において、自我脅威場面は、自己愛的脆弱性傾向が高い場合、自己評価を維持することが困難である予測される。そのため、自我脅威場面において、何らかの対処方略を用いていると推測する。そこで本研究では、素因—ストレスモデルを用いて、素因として自己愛的脆弱性傾向を持つ人がストレス事態に直面した時に、どのように対処を行うのかを検討する。

目 的

従来、自己愛的脆弱性とストレスとの相互作用を検討した研究は少ない。そこで本研究では、自己愛的脆弱性、認知的評価、対処方略の関連が、精神的健康（ストレス反応）へのどのような影響を及ぼすのかを検討するために、素因—ストレスモデルを用いて検討する。また、自己愛的脆弱性の特徴を詳細に検討するため、本研究では NVS 短縮版の 4 下位尺度（《自己顕示抑制》、《自己緩和不全》、《潜在的特権意識》、《承認・賞賛過敏性》）に着目して、以下の仮説を検討する。

傷つきやすい特徴を有する自己愛的脆弱性傾向が高い場合、ストレスへの脆弱性が予測される。そのため、自我脅威場面での出来事を、自己愛的脆弱性傾向が低い場合よりもより脅威に感じやすく、ストレス反応が高くなると推測される。そこで、自己愛的脆弱性、自我脅威場面における認知的評価とストレス反応との関連を検討する。次に、自分自身で緊張や不安を軽減させる機能に脆弱性を抱える自己愛的脆弱性傾向が高い場合、何らかの対処方略を行うことで、ストレス反応が軽減すると推測される。そこで、自己愛的脆弱性、対処方略とストレス反応との関連を検討する。

自我脅威場面における認知的評価と認知的・行動的なストレス対処、自己愛的脆弱性との関連を明らかにすることは、自己愛的な青年期の人々のストレス反応を軽減あるいは緩和する対処を検討でき、臨床現場で役立つ示唆の一つになると考えられる。そのため、本研究は意義のある検討になると考えられる。

方 法

参加者

大学生・大学院生 379 名（男性 179 名、女性 200 名）を対象とした。全体の平均年齢は 20.0 歳 ($SD = 1.95$)、男性の平均年齢は 19.8 歳 ($SD = 2.31$) で年齢不明者が 1 名いた。女性の平均年齢は 20.1 歳 ($SD = 1.54$) であった。

調査方法

無記名自記式目録調査を宿題法・縁故法によって行った。また、3 つの心理学講座の授業後に、集団自記式目録調査を実施した。

質問紙構成

本研究において、自己愛的脆弱性尺度短縮版の 4 下位尺度をそれぞれ、《 》 で示した。次に、認知的評価測定尺度の 4 下位尺度を [] で示した。次に、3 次元モデルにもとづく対処方略尺度の 8 下位尺度を [] で示した。最後に、心理ストレス反応尺度の 3 下位尺度を 〈 〉 で示した。

(a) GHQ 精神健康度調査票の短縮版 (General Health Questionnaire; GHQ12) (本田・柴田・中根, 2001) : GHQ12 は, 精神的健康を測定する目的で作成された尺度である。全 12 項目で構成されている。教示は, 「この 1 週間のあなたのからだや心の状態についてお聞きします。各々の事柄について, もっとも当てはまるものを選んでください。」とした。回答方法は「できた (0 点)」から「全くできなかった (1 点)」までの 4 件法で求め, 項目の合計得点が高いほど, 精神的健康度が低いことを示している。

(b) 自己愛的脆弱性尺度短縮版 (Narcissistic Vulnerability Scale; NVS 短縮版) (上地・宮下, 2009) : この尺度は, 上地・宮下 (2009) によるもので, Kohut, H.の自己心理学の観点から自己愛的脆弱性について測定する目的で作成された尺度である。全 20 項目で, 《自己顕示抑制》, 《自己緩和不全》, 《潜在的特権意識》, 《承認・賞賛過敏性》の 4 つの下位尺度で構成されている。教示は, 「日常生活の中でどのくらいあるか「まったくない」から「よくある」の選択肢の中から 1 つを選んでください。」とした。回答方法は「まったくない (1 点)」から「よくある (5 点)」までの 5 件法で求め, 項目合計得点が高いほど, 自己愛的脆弱性傾向が高いことを示している。

(c) 認知的評価測定尺度 (Cognitive Appraisal Rating Scale : CARS) (鈴木・坂野, 1998) : この尺度は, 自我脅威状況における認知的評価を測定する目的で作成された尺度である。全 8 項目で, [コミットメント], [影響性の評価], [脅威性の評価], [コントロールの可能性] の 4 つの下位尺度で構成されている。設定された自我脅威状況の内容を読んだ後, そのような状況をどのようにとらえているのか回答を求めた。教示は, 「あなたが枠内 (状況の説明文) のような状況に遭遇した時に, その状況をどのようにとらえているのかお聞きするものです。」とした。回答方法は「そう思う (0 点)」から「全くそう思う (3 点) までの 4 件法で求めた。

自我脅威場面の設定では, 大学生の人々が学生生活の中で一般的に経験しやすいと考えられる発表場面を設定した。自我脅威場面の設定を行う際に, どのような状況が自我脅威であるのか, 臨床心理学教員 3 名, 臨床心理学を専攻する大学院生・学部生 12 名で検討した。自我脅威場面は以下の通りである。

「あなたは一生懸命にゼミ発表の準備し, 自分自身でも「今回のゼミ発表の内容はかなり良い」と考えて, ゼミ発表に臨みました。ところが, ゼミ発表を終えてみると, 先生や同期から「今回のゼミ発表の内容は全然良くない」という評価を受けました。」

(d) 3 次元モデルにもとづく対処方略尺度 (Tri-axial Coping Scale; TAC-24) (神名村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995) : 全 24 項目で, [情報収集], [放棄・諦め], [肯定的解釈], [計画立案], [回避的思考], [気晴らし], [カタルシス], [責任転嫁] の 8 つの下位尺度で構成されている。教示は, 「精神的につらい状況に遭遇した時, その場の困難を乗り越え, 落ち着くために, あなたは普段から, どのように考え, どのように行動するようにしていますか。自分がどの程度当てはまるか教えてください。」とした。回答方法は, 「そのようにしたこと (考えたこと) はこれまでない。今後も決してないだろう。(1 点)」から「いつもそうしてきた (考えてきた)。今後も常にそうするだろう。(5 点)」までの 5 件法で求めた。

(e) 心理的ストレス反応尺度 (Stress Response Scale; SRS-18) (鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬・坂

野, 1997) : 全 18 項目で, 〈抑うつ・不安〉, 〈不機嫌・怒り〉, 〈無気力〉の 3 つの下位尺度で構成されている。教示は, 「ここ 1 週間の感情や行動の状態にどのくらい当てはまるかを答えてください。」とした。回答方法は, 「全くちがう (0 点)」から「そのとおりだ (3 点)」までの 4 件法で求めた。

(f) フェイス項目では, 学年, 年齢, 性別を尋ねた。

結 果

1. GHQ12, NVS 短縮版, CARS, TAC-24, SRS-18 の構成・記述統計量・信頼性係数

調査に使用された全ての尺度について, 記述統計量と信頼性係数を算出した (Table1)。GHQ12, NVS短縮版, CARS, TAC-24, SRS-18は, 平均値・標準偏差・最大値・最小値・信頼性係数 α を算出した。全ての尺度において, α が.578から.998の信頼性が得られ, 各尺度の内的一貫性は一定以上の水準にあると思われる。

Table 1
記述統計量と信頼係数 (N = 379)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	α		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	α
GHQ	4.7	3.02	0	12	.780	情報収集	9.7	2.81	3	15	.815
自己顕示抑制	15.4	3.90	5	25	.778	放棄・諦め	9.5	2.84	3	15	.778
自己緩和不全	15.9	4.38	5	25	.833	肯定的解釈	7.7	1.98	3	15	.691
潜在的特権意識	14.6	4.69	5	25	.848	計画立案	9.1	2.76	3	15	.685
承認賞賛過敏性	13.1	3.80	5	25	.812	回避的思考	10.1	3.00	3	15	.732
コミットメント	4.1	1.64	0	6	.998	気晴らし	8.5	2.68	3	15	.621
影響性の評価	4.1	1.51	0	6	.704	カタルシス	9.9	2.65	3	15	.842
脅威性の評価	1.8	1.77	0	6	.794	責任転嫁	6.0	2.45	3	15	.799
コントロール	2.1	1.43	0	6	.578	抑うつ・不安	6.1	4.21	0	18	.820
						不機嫌・怒り	5.8	4.61	0	18	.870
						無気力	4.2	4.29	0	18	.880

2. 自己愛的脆弱性, 認知的評価, 対処方略の性差

自己愛の性差に関しては, 男性の得点が女性より有意に高いという報告が多いが (小玉, 2010; 小西・山田・佐藤, 2008; 清水・海塚, 2002), 有意な性差は認められなかったという結果が報告されている (相良, 2006)。以上のように, 自己愛の高さの性差に関しては明確な結論は出ていないが, 多くの研究で自己愛人格傾向の表れ方が男女で異なることが示唆されている (上地・宮下, 2005; 小西ら, 2008; 松並, 2014)。そこで, NVS 短縮版の 4 下位尺度, CARS の 3 下位尺度, TAC-24 の 8 下位尺度の男女の際について検討を行った。

まず, NVS短縮版の4下位尺度について以下の結果が分かった。《自己顕示抑制》において性差が有意であった ($t(377) = -5.28, p < .001$)。《自己緩和不全》において性差が有意であった ($t(377) =$

-4.03, $p < .001$)。《潜在的特権意識》において性差が有意であった ($t(377) = -5.05, p < .001$)。《承認・賞賛過敏性》において性差が有意傾向であった ($t(377) = -5.05, p < .10$)。

次に、CARSの3下位尺度について以下の結果が分かった。[コミットメント]において性差が有意でなかった ($t(377) = 0.60, n.s.$)。[影響性の評価]において性差が有意でなかった ($t(377) = -0.84, n.s.$)。[脅威性の評価]において性差が有意でなかった ($t(377) = -1.74, n.s.$)。[コントロールの可能性]において性差が有意であった ($t(377) = 4.16, p < .001$)。

次に、対処方略の8下位尺度について以下の結果が分かった。[情報収集]において性差が有意でなかった ($t(377) = -1.09, n.s.$)。[放棄・諦め]において性差が有意でなかった ($t(377) = -0.83, n.s.$)。[肯定的解釈]において性差が有意でなかった ($t(377) = -1.63, n.s.$)。[計画立案]において性差が有意傾向であった ($t(377) = -1.69, p < .10$)。[回避的思考]において性差が有意であった ($t(377) = -7.23, p < .001$)。[気晴らし]において性差が有意でなかった ($t(377) = -1.22, n.s.$)。[カタルシス]において性差が有意でなかった ($t(377) = 1.64, n.s.$)。[責任転嫁]において性差が有意でなかった ($t(377) = -0.45, n.s.$)。

以上のことから、NVS短縮版の4下位尺度には性差が見られた一方で、CARS, TAC-24については、ほぼ性差が見られなかった。これらの結果から、以降の分析では性差を考慮せずに検討を行う。

3. GHQ12, NVS短縮版, CARS, TAC-24, SRS-18の相関

全ての尺度得点間の相関を比較したところ、次のような傾向がみられた。

(1) 自己愛的脆弱性と精神的健康の相関

NVS短縮版の下位尺度とGHQ12との相関は、正の相関がみられた ($r = .23 \sim .27, p < .01$)。自己愛的脆弱性の傾向が高くなることで、精神的健康度が低くなることが示唆された (Table 2)。結果から、上地・宮下 (2005) の結果と一致する。つまり、自己愛的脆弱性の傾向が高くなることで、精神的健康度が低くなることが示唆された。

Table 2
自己愛的脆弱性と精神的健康との相関

	GHQ
自己顕示抑制	.27**
自己緩和不全	.27**
潜在的特権意識	.23**
承認賞賛過敏性	.25**

* $p < .05$, ** $p < .01$

(2) 自己愛的脆弱性と認知的評価の相関

NVS短縮版の下位尺度とCARSとの相関は、[コミットメント]、[影響性の評価]、[脅威性の評価]では正の相関がみられた ($r = .12 \sim .38, p < .01$)。一方、[コントロールの可能性]では負の相関

が見られた ($r = -.14 \sim .33, p < .01$)。自己愛的脆弱性の傾向が高くなることで、自我脅威状況というネガティブな場面へ積極的に関わる傾向が強くなり、その場面からの影響性や脅威性が高いと感じていることが示唆された。つまり、自己愛的脆弱性の特徴が高いと、自我脅威場面において自己統制感が弱くなることが示唆された (Table 3)。

Table 3
自己愛的脆弱性と認知的評価との相関

	コミットメント	影響性の評価	脅威性の評価	コントロールの可能性
自己顕示抑制	.13*	.13*	.38**	-.33**
自己緩和不全	.18**	.14**	.28**	-.18**
潜在的特権意識	.09	.12*	.30**	-.22**
承認賞賛過敏性	.05	.03	.29**	-.14**

* $p < .05$, ** $p < .01$

(3) 自己愛的脆弱性と対処方略の相関

次に、NVS短縮版の下位尺度である《自己顕示抑制》とTAC-24の下位尺度である〔肯定的解釈〕、〔回避的思考〕との間で、正の相関が見られた ($r = .14, .30, p < .01$)。《自己緩和不全》と〔回避的思考〕では正の相関が見られた ($r = .24, p < .01$)。《潜在的特権意識》と〔放棄・諦め〕、〔肯定的解釈〕、〔計画立案〕、〔回避的思考〕との間で、正の相関が見られた ($r = .15 \sim .62, p < .01$)。《承認・賞賛過敏性》と〔肯定的解釈〕と〔回避的思考〕との間で、正の相関が見られた ($r = .28, .22, p < .01$)。《自己顕示抑制》と〔カタルシス〕の間で、負の相関が見られた ($r = -.11, p < .05$)。自己愛的脆弱性の中でも、それぞれ4因子の傾向が強くなることで、取りやすい対処方略があることが示唆された。また、自分で不安や緊張を緩和することが難しい特徴である《自己顕示抑制》は、自ら人に話を聞いてもらって気持ちを落ち着かせる〔カタルシス〕という対処を行わない傾向があることが示唆された (Table 4)。

Table 4
自己愛的脆弱性と対処方略との相関

	情報収集	放棄・諦め	肯定的解釈	計画立案	回避的思考	気晴らし	カタルシス	責任転嫁
自己顕示抑制	.03	.03	.14**	.11*	.30**	.03	-.11*	.04
自己緩和不全	.09	.07	.10*	.11*	.24**	.03	-.01	-.01
潜在的特権意識	.12*	.21**	.15**	.21**	.62**	.06	-.01	.01
承認賞賛過敏性	.04	.01	.28**	.13*	.22**	.07	.02	.05

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 自己愛的脆弱性、認知的評価、対処方略がストレス反応に及ぼす影響

SRS-18の下位尺度〈抑うつ・不安〉、〈不機嫌・怒り〉、〈無気力〉を目的変数とし、NVS短縮版の4下位尺度得点、CARSの3下位尺度得点、TAC-24の8下位尺度得点及びそれらの積の項 (交互作用項)

を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。ステップ1では性別の主効果、ステップ2では各説明変数の主効果、ステップ3では2次の交互作用項を投入した。変数選択に関しては、ステップ1と2は強制投入法を、ステップ3はステップワイズ法を採用した。ステップ1と2で強制投入法を採用しているのは、交互作用項の効果が有意であるにもかかわらず、その交互作用項に含まれる要因の主効果がモデルから除外されてしまうという事態を避けるためである。また、モデルの説明力を重視する観点から、ステップワイズ法での投入規準は10%水準とした。主効果の項と交互作用項の間に多重共線性が生じるのを避けるため、各変数は事前に中心化した (Aiken & West, 1991)。

交互作用項が有意であった場合、前田 (2008) の手法に基づいて、以下の方法で単純傾斜の有意性の検討を行った。

まず、交互作用項の下位検定を実施するために、式 (1)、(2) によって算出し、新しい変数Z高群、Z低群を作成した。本研究において、説明変数XはNVS短縮版の中心化した4下位尺度得点、新しい変数Z (高低群) は中心化したCARSの3下位尺度得点あるいはTAC-24の8下位尺度得点のこととする。

$$Z_{\text{高群}} = Z - (1SD) \quad (1)$$

$$Z_{\text{低群}} = Z - (-1SD) \quad (2)$$

次に、説明変数Xと、新たに作ったZ高群、Z低群をそれぞれかけ合わせた変数XZ高群、XZ低群を作成した。これは、交互作用項として、Zの代わりにZ高群、Z低群の変数を用いることで、対応するZの値での交互作用効果を検討できるようにするためである。

最後に、変数X、Z高群、XZ高群を投入する階層的重回帰分析、変数X、Z低群、XZ低群を投入する階層的重回帰分析を、それぞれ実施した。

ステップ1では性別の主効果、ステップ2では各説明変数と新たに作成したZ高群 (Z低群) の主効果、ステップ3では交互作用項を投入した。変数選択に関しては、ステップ1、2、3は強制投入法を採用した。

(1) ストレス反応 〈抑うつ・不安〉 に対する自己愛的脆弱性と認知的評価の関連

ストレス反応に対するNVS短縮版との交互作用による影響を検討するため、SRS-18の〈抑うつ・不安〉因子を目的変数とする階層的重回帰分析を行った (Table 5)。ステップ1には、性別を説明変数として投入し、ステップ2においてNVS短縮版、CARSがそれぞれ〈抑うつ・不安〉に及ぼす主効果を検討した。結果、ステップ2のモデルの適合度を示す R^2 は.24 ($F(9, 37) = 12.63, p < .001$)であった。《自己顕示抑制》 ($B = .18, \beta = .17, p < .05$)、《自己緩和不全》 ($B = .14, \beta = .14, p < .05$)、[脅威性の評価] ($B = .50, \beta = .21, p < .001$)の主効果が有意であった。つまり、《自己顕示抑制》、《自己緩和不全》、[脅威性の評価] がそれぞれ高い場合、〈抑うつ・不安〉が高くなることが示された。

次に、ステップ2の全ての変数の交互作用をステップワイズ法によって検討した (ステップ3)。ステップ3のモデルの適合度を示す R^2 は.25 ($F(10, 37) = 12.10, p < .001$) であった。ステップ2とステップ3の2つのモデルによる説明率を比較したところ ΔR^2 は有意な変化量を示した ($\Delta R = .01, p < .05$)。

分析の結果、《承認・賞賛過敏性》と [影響性の評価] の交互作用項が、有意であった ($B = .08, \beta = .11, p < .05$)。また、ステップ2で有意だった《自己顕示抑制》 ($B = .19, \beta = .17, p < .05$)、《自己緩和不全》 ($B = .13, \beta = .14, p < .05$)、[脅威性の評価] ($B = .48, \beta = .20, p < .001$)の主効果は、ステ

ップ3でも有意であった。交互作用項が有意だったことにより、単純傾斜の有意性の検定を行った (Table 6, Figure 1)。分析の結果、[影響の評価]が高群の場合、《承認・賞賛過敏性》の単純傾斜が有意であった ($B = .31, \beta = .29, p < .01$)。つまり、[影響性の評価] 高群は、《承認・賞賛過敏性》と〈抑うつ・不安〉の関連を調整する。[影響性の評価]が高いほど、《承認・賞賛過敏性》と〈抑うつ・不安〉の正の関連が強くなる。また、[影響性の評価]が低群の場合、《承認・賞賛過敏性》の単純傾斜が有意でなかった ($B = -.17, \beta = -.14, n.s.$)。つまり、両者の関連は、高群で有意となったことから、《承認・賞賛過敏性》の抑うつを高める効果は、自我脅威場面からの影響を高く評価している場合に現れる可能性がある。

Table 5
NVIS短縮版, CARSを説明変数, 抑うつ・不安を目的変数とする階層的重回帰分析 ($N=379$)

説明変数	目的変数 抑うつ/不安								
	ステップ1			ステップ2			ステップ3		
	B	BSE	β	B	BSE	β	B	BSE	β
性別	.52	.43	.06	-.46	.41	-.06	-.40	.41	-.05
自己顕示抑制				.18*	.09*	.17*	.19*	.09*	.17*
自己緩和不全				.14*	.06*	.14*	.13*	.06*	.14*
潜在的特権意識				.03	.05	.03	.03	.05	.04
承認・賞賛過敏性				.07	.06	.07	.06	.06	.05
コミットメント				.01	.18	.01	.04	.18	.02
影響性の評価				.13	.19	.05	.13	.19	.05
脅威性の評価				.50***	.12***	.21***	.44***	.12***	.20***
コントロールの可能性				-.13	.15	-.04	-.14	.15	-.05
承認・賞賛過敏性×影響性の評価							.08*	.03*	.11*
R^2			.00			.24***			.25*
ΔR^2						.23***			.01*

† $p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001$

Table 6
承認・賞賛過敏性と影響性の評価との単純傾斜分析

	影響性の評価低群 (-1SD)	影響性の評価中間群 (平均)	影響性の評価高群 (+1SD)
承認・賞賛過敏性低群 (-1SD)	6.37	6.09	5.82
承認・賞賛過敏性中間群 (平均)	6.11	6.31	6.50
承認・賞賛過敏性高群 (+1SD)	5.86	6.52	7.17

注) 表中の値は、非標準化偏回帰係数

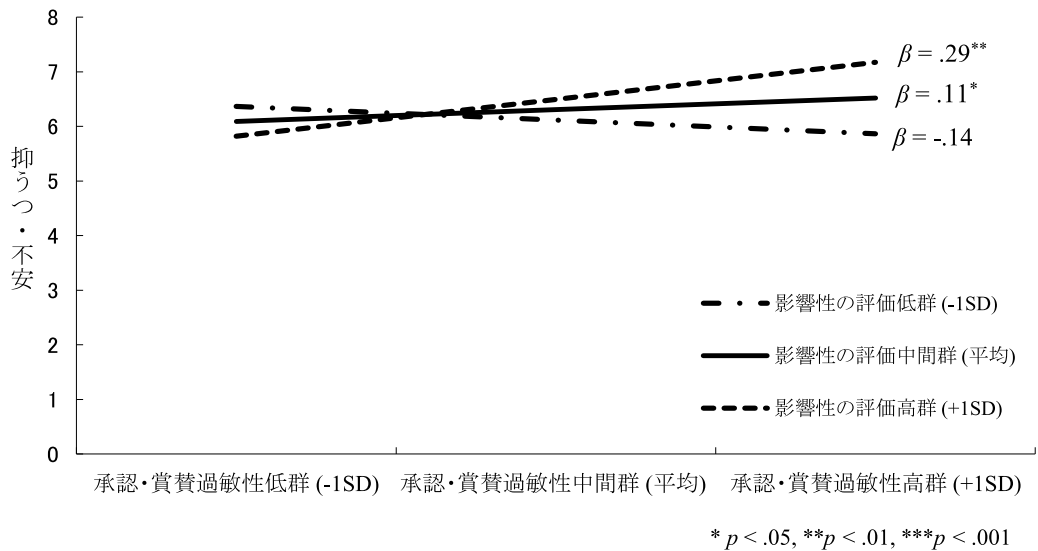


Figure 1. 自己愛的脆弱性と認知的評価の階層的重回帰分析の結果

(2) ストレス反応〈不機嫌・怒り〉に対する自己愛的脆弱性と認知的評価の関連

ストレス反応に対するNVS短縮版とCARSの交互作用による影響を検討するため、SRS-18の〈不機嫌・怒り〉因子を目的変数する階層的重回帰分析を行った (Table 7)。ステップ1で性別を説明変数として投入し、ステップ2において、CARS、NVS短縮版がそれぞれ〈不機嫌・怒り〉に及ぼす主効果を検討した。ステップ2のモデルの適合度を示す R^2 は .24 ($F(9, 37) = 12.80, p < .001$) であった。分析の結果、《自己顕示抑制》($B = .20, \beta = .17, p < .05$)、《潜在的特権意識》($B = .17, \beta = .18, p < .01$)、[脅威性の評価] ($B = .63, \beta = .24, p < .001$)の主効果が有意であった。つまり、《自己顕示抑制》が高い場合、《潜在的特権意識》、[脅威性の評価] がそれぞれ高い場合、〈不機嫌・怒り〉が高くなることが示唆された。

Table 7

NVS短縮版, CARSを説明変数, 不機嫌・怒りを目的変数とする階層的重回帰分析 (N=379)

説明変数	目的変数 不機嫌・怒り					
	ステップ1			ステップ2		
	B	BSE	β	B	BSE	β
性別	.11	.47	.12	.11	.45	.01
自己顕示抑制				.20*	.09*	.17*
自己緩和不全				.00	.07	.00
潜在的特権意識				.17**	.06**	.18**
承認・賞賛過敏性				.04	.07	.03
コミットメント				.00	.20	.00
影響性の評価				.24	.21	.08
脅威性の評価				.63***	.13***	.24***
コントロールの可能性				.12	.16	.04
R^2			.01			.24***
ΔR^2						.22***

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(3) ストレス反応〈無気力〉に対する自己愛的脆弱性と認知的評価の関連

ストレス反応に対するNVS短縮版とCARSの交互作用による影響を検討するため、SRS-18の〈無気力〉因子を目的変数とする階層的重回帰分析を行った (Table 8)。ステップ1で性別を説明変数として投入し、ステップ2において、CARS、NVS短縮版がそれぞれ〈無気力〉に及ぼす主効果を検討した (ステップ2)。ステップ2のモデルの適合度を示す R^2 は .20 ($F(9, 37) = 12.80, p < .001$)であった。分析の結果、《自己顕示抑制》($B = .20, \beta = .17, p < .05$)、《潜在的特権意識》($B = .17, \beta = .18, p < .01$)、[脅威性の評価] ($B = .63, \beta = .24, p < .001$)の主効果が有意であった。つまり、《自己顕示抑制》、《潜在的特権意識》、[脅威性の評価] がそれぞれ高い場合、無気力感が高くなることが示唆された。

Table 8

NV5短縮版, CARSを説明変数, 無気力を目的変数とする階層的重回帰分析 (N=379)

説明変数	目的変数 無気力					
	ステップ1			ステップ2		
	B	BSE	β	B	BSE	β
性別	.53	.44	.06	.03	.43	.00
自己顕示抑制				.07	.09	.06
自己緩和不全				.03	.06	.03
潜在的特権意識				.00	.06	.00
承認・賞賛過敏性				.30***	.07***	.27***
コミットメント				.01	.19	.00
影響性の評価				.14	.20	.05
脅威性の評価				.54***	.13***	.22***
コントロールの可能性				.13	.16	.04
R^2			.00			.20***
ΔR^2						.20***

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(4) ストレス反応〈抑うつ・不安〉に対する自己愛的脆弱性と対処方略の関連

ストレス反応に対するNV5短縮版とTACの交互作用による影響を検討するため、SRS-18の〈抑うつ・不安〉因子を目的変数とする階層的重回帰分析を行った (Table 9)。ステップ1で性別を説明変数として投入し、ステップ2において、TAC-24, NV5短縮版がそれぞれ〈抑うつ・不安〉に及ぼす主効果を検討した。ステップ2のモデルの適合度を示す R^2 は .23 ($F(13, 37) = 8.30, p < .001$) であった。また、ステップ2で有意だった《自己顕示抑制》($B = .20, \beta = .19, p < .05$)、《自己緩和不全》($B = .17, \beta = .18, p < .01$)、[カタルシス] ($B = -.29, \beta = -.19, p < .01$) の主効果がステップ3でも有意であった。つまり、《自己顕示抑制》、《自己緩和不全》がそれぞれ高い場合、〈抑うつ・不安〉が高くなることが示された。一方で、[カタルシス]が高い場合、〈抑うつ・不安〉が低くなることが示された。

次に、ステップ2の全ての変数の交互作用をステップワイズ法によって検討した (ステップ3)。ステップ3のモデルの適合度を示す R^2 は .25 ($F(15, 36) = 8.25, p < .001$) であった。ステップ2とステップ3の2つのモデルによる説明率を比較したところ ΔR^2 は有意な変化量を示した ($\Delta R^2 = .01, p < .05$)。分析の結果、《自己顕示抑制》と[カタルシス]の交互作用項は、有意であった ($B = -.05, \beta = -.15, p < .01$)。また、《潜在的特権意識》と[気晴らし]の交互作用項は、有意であった ($B = .04, \beta = .12, p < .05$)。《自己顕示抑制》($B = .19, \beta = .17, p < .05$)、《自己緩和不全》($B = .19, \beta = .20, p < .01$)、[カタルシス] ($B = -.28, \beta = -.15, p < .01$) の主効果が有意であった。これにより、単純傾斜の有意性の検定を行った (Table 10, 11, Figure2, 3)。

[カタルシス]と《自己顕示抑制》の単純傾斜の有意性の検定の結果、[カタルシス]が高群の場

合、《自己顕示抑制》の単純傾斜が有意でなかった ($B = -.04, \beta = -.04, n.s.$)。〔カタルシス〕が低群の場合、《自己顕示抑制》の単純傾斜が有意だった ($B = .39, \beta = .36, p < .01$)。つまり、〔カタルシス〕低群は《自己顕示抑制》と〈抑うつ・不安〉の関連を調整することが示された。したがって、《自己顕示抑制》の抑うつ・不安を高める効果は、〔カタルシス〕が行われない場合に現れる可能性がある。次に、〔気晴らし〕と《潜在的特権意識》の単純傾斜の有意性の検定の結果、〔気晴らし〕が高群の場合、《潜在的特権意識》の単純傾斜が有意であった ($B = .15, \beta = .17, p < .05$)。〔気晴らし〕が低群の場合、《自己顕示抑制》の単純傾斜が有意でなかった ($B = -.08, \beta = -.09, n.s.$)。つまり、〔気晴らし〕高群は《潜在的特権意識》と〈抑うつ・不安〉の関連を調整することが示された。したがって、《潜在的特権意識》の〈抑うつ・不安〉を高める効果は、〔気晴らし〕がより行われる場合に現れる可能性がある。

Table 9
NVS短縮版, TAC-24を説明変数, 抑うつ・不安を目的変数とする階層的重回帰分析 ($N=379$)

説明変数	目的変数 抑うつ・不安								
	ステップ1			ステップ2			ステップ3		
	<i>B</i>	<i>BSE</i>	β	<i>B</i>	<i>BSE</i>	β	<i>B</i>	<i>BSE</i>	β
性別	.52	.43	.06	-.55	.43	-.07	-.50	.42	-.06
自己顕示抑制				.20*	.08*	.19*	.19*	.08*	.17*
自己緩和不全				.17**	.06**	.18**	.19**	.06**	.20**
潜在的特権意識				.08	.07	.09	.06	.06	.07
承認・賞賛過敏性				.10	.07	.09	.09	.07	.09
情報収集				-.05	.07	-.04	-.03	.07	-.02
放棄・諦め				.05	.08	.03	.04	.08	.02
肯定的解釈				.07	.12	.03	.08	.12	.04
計画立案				-.05	.08	-.03	-.05	.08	-.03
回避的思考				-.04	.09	-.03	-.04	.09	-.03
気晴らし				.13	.08	.08	.08	.08	.05
カタルシス				-.29**	.09**	-.19**	-.28**	.09**	-.18**
責任転嫁				.12	.08	.07	.13	.08	.07
自己顕示抑制×カタルシス							-.05**	.02**	-.15**
潜在的特権意識×気晴らし							.04*	.01*	.12*
R^2			.00			.23***			.25*
ΔR^2						.22***			.01*

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 10
自己顕示抑制とカタルシスとの単純傾斜分析

	カタルシス低群 (-1SD)	カタルシス中間群 (平均)	カタルシス高群 (+1SD)
自己顕示抑制低群 (-1SD)	5.65	5.55	5.45
自己顕示抑制中間群 (平均)	6.70	6.28	5.86
自己顕示抑制高群 (+1SD)	7.76	7.02	6.28

注) 表中の値は、非標準化偏回帰係数

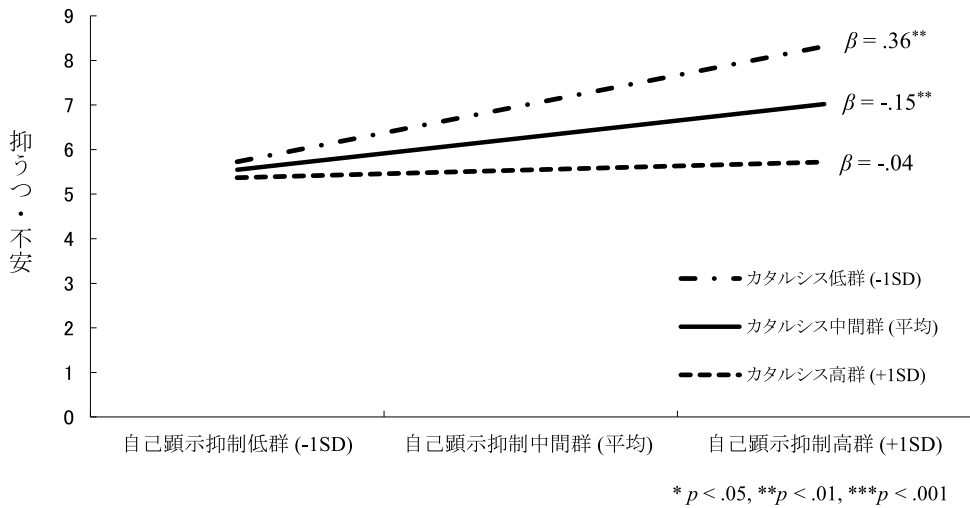


Figure 2. 自己愛的脆弱性と対処方略の階層的重回帰分析の結果

Table 11
潜在的特権意識と気晴らしとの単純傾斜分析

	気晴らし低群 (-1SD)	気晴らし中間群 (平均)	気晴らし高群 (+1SD)
潜在的特権意識低群 (-1SD)	6.24	5.99	5.75
潜在的特権意識中間群 (平均)	6.07	6.28	6.50
潜在的特権意識高群 (+1SD)	5.90	6.57	7.25

注) 表中の値は、非標準化偏回帰係数

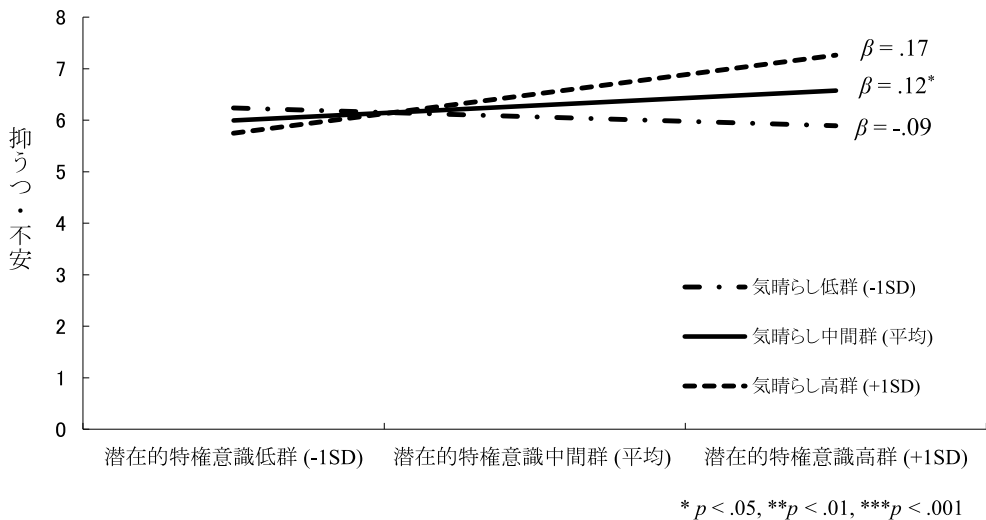


Figure 3. 自己愛的脆弱性と対処方略の階層的重回帰分析の結果

(5) ストレス反応 〈不機嫌・怒り〉に対する自己愛的脆弱性と対処方略の関連

ストレス反応に対するNVS短縮版とTACの交互作用による影響を検討するため、SRS-18の〈不機嫌・怒り〉因子を目的変数する階層的重回帰分析を行った (Table 12)。ステップ1で性別を説明変数として投入し、ステップ2において、TAC-24、NVS短縮版がそれぞれ〈不機嫌・怒り〉に及ぼす主効果を検討した。ステップ2のモデルの適合度を示す R^2 は .22 ($F(13, 37) = 8.03, p < .001$) であった。また、ステップ2で有意だった《自己顕示抑制》 ($B = .20, \beta = .17, p < .05$)、《潜在的特権意識》 ($B = .20, \beta = .20, p < .01$)、〔カタルシス〕 ($B = -.22, \beta = -.13, p < .05$) の主効果がステップ3でも有意であった。つまり、《自己顕示抑制》が高い場合、《潜在的特権意識》が高い場合、〈不機嫌・怒り〉が高くなることが示された。一方で、〔カタルシス〕が高い場合、〈不機嫌・怒り〉が低くなることが示された。

次に、ステップ2の全ての変数の交互作用をステップワイズ法によって検討した (ステップ3)。ステップ3のモデルの適合度を示す R^2 は .27 ($F(17, 36) = 7.79, p < .001$) であった。ステップ2とステップ3の2つのモデルによる説明率を比較したところ ΔR^2 は有意な変化量を示した ($\Delta R^2 = .01, p < .05$)。分析の結果、《自己顕示抑制》と〔カタルシス〕の交互作用項は、有意であった ($B = -.05, \beta = -.12, p < .05$)。また、《潜在的特権意識》と〔気晴らし〕の交互作用項は、有意であった ($B = .07, \beta = .21, p < .001$)。《潜在的特権意識》と〔計画立案〕の交互作用項は、有意であった ($B = -.04, \beta = -.11, p < .05$)。《潜在的特権意識》と〔責任転嫁〕の交互作用項は、有意であった ($B = -.04, \beta = -.10, p < .05$)。《自己顕示抑制》 ($B = .22, \beta = .19, p < .05$)、《潜在的特権意識》 ($B = .17, \beta = .18, p < .05$) の主効果が有意であった。これにより、単純傾斜の有意性の検定を行った (Table 13-16, Figure 4-7)。

〔カタルシス〕と《自己顕示抑制》の単純傾斜の有意性の検定の結果、〔カタルシス〕が高群の場合、《自己顕示抑制》の単純傾斜が有意でなかった ($B = -.07, \beta = -.06, n.s.$)。〔カタルシス〕が低群の場合、《自己顕示抑制》の単純傾斜が有意だった ($B = .45, \beta = .38, p < .01$)。つまり、〔カタルシス〕低群は《自己顕示抑制》と〈不機嫌・怒り〉の関連を調整することが示された。したがって、《自己顕示抑制》の〈不機嫌・怒り〉を高める効果は、〔カタルシス〕が行われない場合に現れる可能性がある。

次に、〔気晴らし〕と《潜在的特権意識》の単純傾斜の有意性の検定の結果、〔気晴らし〕が高群の場合、《潜在的特権意識》の単純傾斜が有意であった ($B = .31, \beta = .31, p < .01$)。〔気晴らし〕が低群の場合、《潜在的特権意識》の単純傾斜が有意でなかった ($B = .04, \beta = .04, n.s.$)。つまり、〔気晴らし〕低群は《潜在的特権意識》と〈不機嫌・怒り〉の関連を調整することが示された。したがって、《潜在的特権意識》の〈不機嫌・怒り〉を高める効果は、〔気晴らし〕がより行われる場合に現れる可能性がある。

次に、〔計画立案〕と《潜在的特権意識》の単純傾斜の有意性の検定の結果、〔計画立案〕が高群の場合、《潜在的特権意識》の単純傾斜が有意でなかった ($B = .05, \beta = .05, n.s.$)。〔計画立案〕が低群の場合、《潜在的特権意識》の単純傾斜が有意であった ($B = .30, \beta = .31, p < .01$)。つまり、〔計画立案〕低群は《潜在的特権意識》と〈不機嫌・怒り〉の関連を調整することが示された。したが

って、《潜在的特権意識》の〈不機嫌・怒り〉を高める効果は、〔計画立案〕が行われていない場合に現れる可能性がある。

最後に、〔責任転嫁〕と《潜在的特権意識》の単純傾斜の有意性の検定の結果、〔責任転嫁〕が高群の場合、《潜在的特権意識》の単純傾斜が有意でなかった ($B = .06, \beta = .06, n.s.$)。〔責任転嫁〕が低群の場合、《潜在的特権意識》の単純傾斜が有意であった ($B = .28, \beta = .29, p < .01$)。つまり、〔責任転嫁〕低群は《潜在的特権意識》と〈不機嫌・怒り〉の関連を調整することが示された。したがって、《潜在的特権意識》の〈不機嫌・怒り〉を高める効果は、〔責任転嫁〕が行われていない場合に現れる可能性がある。

Table 12
NVS短縮版, TAC-24を説明変数, 不機嫌・怒りを目的変数とする階層的重回帰分析 ($N=379$)

説明変数	目的変数 不機嫌・怒り								
	ステップ1			ステップ2			ステップ3		
	<i>B</i>	<i>BSE</i>	β	<i>B</i>	<i>BSE</i>	β	<i>B</i>	<i>BSE</i>	β
性別	.10	.47	.12	-.07	.47	-.01	-.08	.46	-.01
自己顕示抑制				.20*	.09*	.17*	.22*	.09*	.19*
自己緩和不全				.05	.07	.05	.06	.07	.05
潜在的特権意識				.20**	.07**	.20**	.17*	.07*	.18*
承認・賞賛過敏性				.12	.07	.10	.11	.07	.09
情報収集				-.14	.08	-.08	-.14	.08	-.08
放棄・諦め				.09	.08	.06	.07	.08	.04
肯定的解釈				-.25	.13	-.11	-.25	.13	-.11
計画立案				-.02	.09	-.01	-.03	.09	-.02
回避的思考				.04	.10	.03	.04	.10	.03
気晴らし				.17	.09	.10	.10	.09	.06
カタルシス				-.23*	.01*	-.13*	-.19*	.10*	-.11*
責任転嫁				.12	.09	.06	.16	.09	.09
潜在的特権意識×気晴らし							.07***	.02***	.21***
自己顕示抑制×カタルシス							-.05*	.02*	-.12*
潜在的特権意識×計画立案							-.04*	.02*	-.11*
潜在的特権意識×責任転嫁							-.04*	.02*	-.10*
R^2			.00			.22***			.27*
ΔR^2						.21***			.01*

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 13
自己顕示抑制とカタルシスとの単純傾斜分析

	カタルシス低群 (-1SD)	カタルシス中間群 (平均)	カタルシス高群 (+1SD)
自己顕示抑制低群 (-1SD)	5.00	5.00	5.01
自己顕示抑制中間群 (平均)	6.35	5.86	5.37
自己顕示抑制高群 (+1SD)	7.71	6.72	5.73

注) 表中の値は、非標準化偏回帰係数

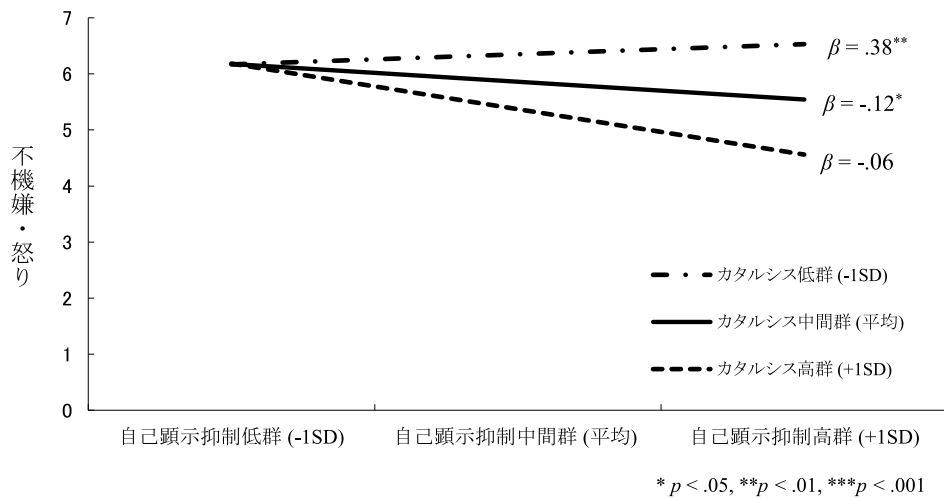


Figure 4. 自己愛的脆弱性と対処方略の階層的重回帰分析の結果

Table 14
潜在的特権意識と気晴らしとの単純傾斜分析

	気晴らし低群 (-1SD)	気晴らし中間群 (平均)	気晴らし高群 (+1SD)
潜在的特権意識低群 (-1SD)	5.64	5.05	4.46
潜在的特権意識中間群 (平均)	5.59	5.86	6.14
潜在的特権意識高群 (+1SD)	5.53	6.68	7.82

注) 表中の値は、非標準化偏回帰係数

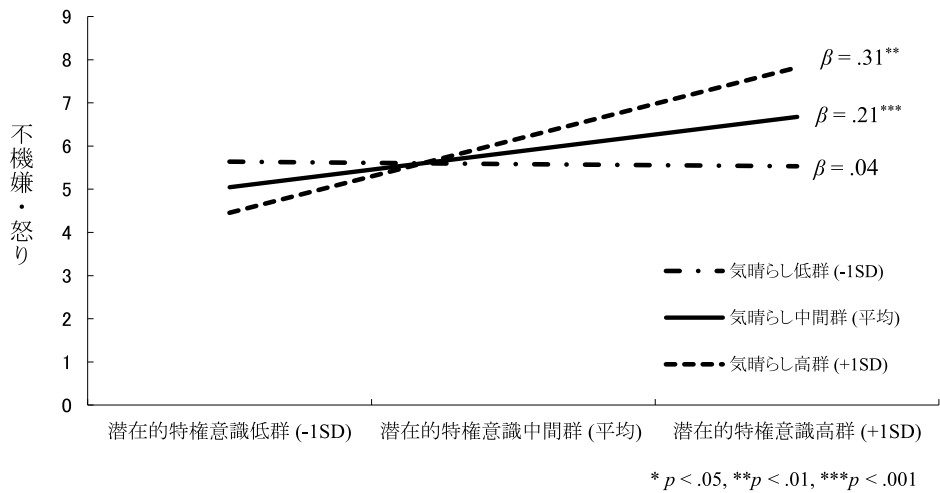


Figure 5. 自己愛的脆弱性と対処方略の階層的重回帰分析の結果

Table 15

潜在的特権意識と計画立案との単純傾斜分析

	計画立案低群 (-1SD)	計画立案中間群 (平均)	計画立案高群 (+1SD)
潜在的特権意識低群 (-1SD)	4.62	5.05	5.47
潜在的特権意識中間群 (平均)	5.94	5.86	5.78
潜在的特権意識高群 (+1SD)	7.26	6.68	6.09

注) 表中の値は、非標準化偏回帰係数

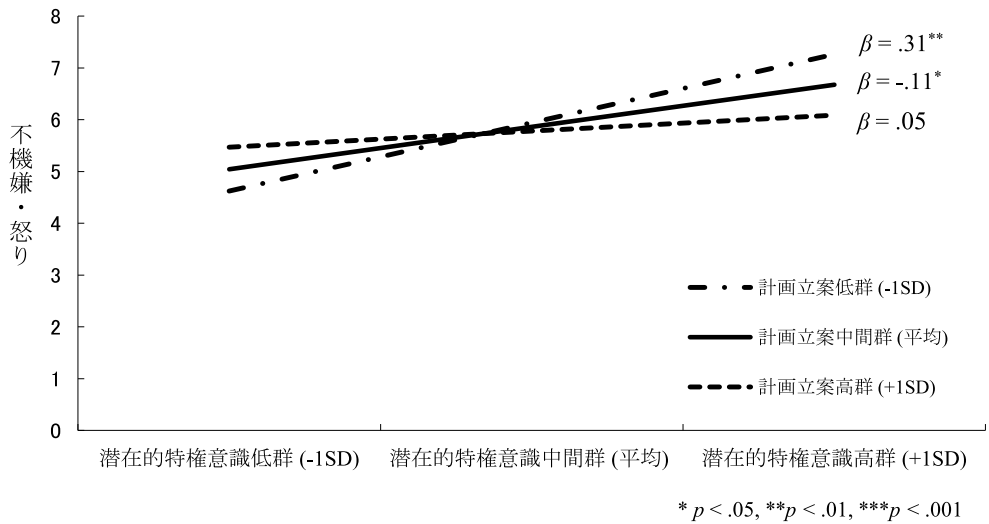


Figure 6. 自己愛的脆弱性と対処方略の階層的重回帰分析の結果

Table 16

潜在的特権意識と責任転嫁との単純傾斜分析

	責任転嫁低群 (-1SD)	責任転嫁中間群 (平均)	責任転嫁高群 (+1SD)
潜在的特権意識低群 (-1SD)	4.21	5.05	5.88
潜在的特権意識中間群 (平均)	5.47	5.86	6.25
潜在的特権意識高群 (+1SD)	6.73	6.68	6.62

注) 表中の値は、非標準化偏回帰係数

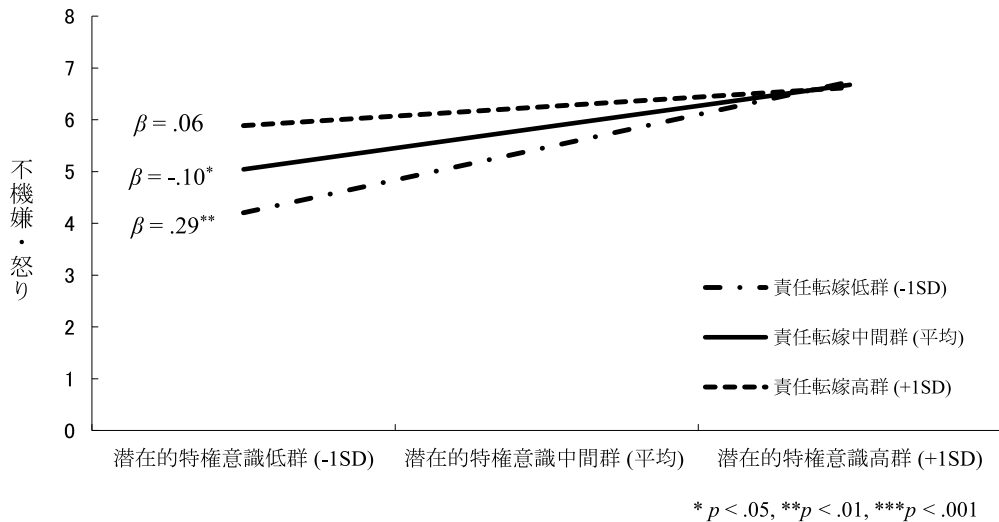


Figure 7. 自己愛的脆弱性と対処方略の階層的重回帰分析の結果

(6) ストレス反応〈無気力〉に対する自己愛的脆弱性と対処方略の関連

ストレス反応に対するNVS短縮版とTACの交互作用による影響を検討するため、SRS-18の〈無気力〉因子を目的変数する階層的重回帰分析を行った (Table 17)。ステップ1で性別を説明変数として投入し、ステップ2において、TAC-24、NVS短縮版がそれぞれ〈無気力〉に及ぼす主効果を検討した。ステップ2のモデルの適合度を示す R^2 は .19 ($F(13, 37) = 6.78, p < .001$)であった。

分析の結果、《承認・賞賛過敏性》($B = .32, \beta = .28, p < .001$)、[カタルシス] ($B = -.24, \beta = -.15, p < .05$)、[責任転嫁] ($B = .19, \beta = .11, p < .05$)の主効果が有意であった。つまり、《承認・賞賛過敏性》、[カタルシス]、[責任転嫁]がそれぞれ高い場合、〈無気力〉が高くなることが示唆された。

Table 17

NV5短縮版, TAC-24を説明変数, 無気力を目的変数とする階層的重回帰分析 (N=379)

説明変数	目的変数 無気力					
	ステップ1			ステップ2		
	B	BSE	β	B	BSE	β
性別	.53	.44	.06	-.30	.45	-.03
自己顕示抑制				.06	.09	.06
自己緩和不全				.08	.06	.08
潜在的特権意識				.00	.07	.00
承認・賞賛過敏性				.32***	.07**	.28***
情報収集				-.07	.07	-.04
放棄・諦め				-.07	.08	-.05
肯定的解釈				.11	.12	.05
計画立案				.05	.08	.03
回避的思考				.10	.10	.07
気晴らし				-.04	.09	-.02
カタルシス				-.24*	.09*	-.15*
責任転嫁				.18*	.09*	.11*
R^2			.00			.19***
ΔR^2						.19***

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考 察

本研究では、自己愛的脆弱性とストレスである自我脅威状況に対する認知的評価の関連および、対処方略の関連が、ストレス反応へ及ぼす影響を検討した。

自己愛的脆弱性とストレスである自我脅威状況に対する認知的評価がストレス反応へ及ぼす影響について、階層的重回帰分析で分析した結果、《自己顕示抑制》と [影響性の評価] において、有意な交互作用が認められた。また、自己愛的脆弱性と対処方略がストレス反応へ及ぼす影響について、階層的重回帰分析で実施した結果、《自己顕示抑制》と [カタルシス]、《潜在的特権意識》と [気晴らし]、《潜在的特権意識》と [計画立案]、《潜在的特権意識》と [責任転嫁] において、有意な交互作用効果が認められた。以下、自己愛的脆弱性の4つのサブタイプ別に、認知的評価、対処方略の関連が、ストレス反応に及ぼす影響について考察を行う。

《自己顕示抑制》について

《自己顕示抑制》の高さは〈抑うつ・不安〉、〈不機嫌・怒り〉の高さと関連していることが示された。以上から、《自己顕示抑制》が高い場合、ストレス反応は抑うつ感や怒りとして表出しやすいことが示された。《自己顕示抑制》は「注目を浴びたり自己を顕示したりする場面に遭遇すると強い

恥意識が生じるため、自己顕示を抑制しがちになる」(上地・宮下, 2005)という特徴があり、対人場面において潜在的な恥意識を抱えていると解することができる。伊藤・村瀬・金井(2011)によれば、対人場面は「自分」と「他者」の意識が明確になるために、自己のあり方といった意識の高まりが起り、自身の行動への焦化が起りやすいと言及している。伊藤ら(2011)は、過敏型自己愛傾向と対人恐怖心性との関連を検討した結果、自己のあり方の不安定さや恥意識の高さが、対人関係においてより活性化され、自己への傷つきが生じやすくなると示唆している。本研究においても、《自己顕示抑制》が高まることで、恥意識が喚起され、抑うつ感や怒りといったストレス反応を表出しやすいと考えられる。

次に、《自己顕示抑制》と対処方略との関連について、《自己顕示抑制》と〔カタルシス〕の交互作用効果が認められ、〔カタルシス〕が行われない場合、《自己顕示抑制》が高いほど、抑うつ感や怒りを高める可能性が示唆された。《自己顕示抑制》が高い場合は、強い恥意識を感じている際に、人に話を聞いてもらい、気を静めようとすることによってストレス反応を軽減していると予想されていた。しかし、実際は〔カタルシス〕高群と《自己顕示抑制》の交互作用項が有意ではないことから、その仮説は支持されなかった。ただし、《自己顕示抑制》が高く、他者の存在によって自己の傷つきを緩和することができない場合、抑うつ感や怒りを高めてしまう。したがって、〔カタルシス〕による対処方略は、《自己顕示抑制》が高い場合、必要であると考えられる。

《自己緩和不全》について

《自己緩和不全》の高さは〈抑うつ・不安〉の高さと関連していることが示された。これより、《自己緩和不全》が高い場合、ストレス反応は抑うつ感や不安感として表出しやすいことが示された。しかし、本研究より、対処方略との関連が見られなかったことから、《自己緩和不全》が高い場合、対処方略によってストレス反応を軽減・緩和することが難しい可能性が示唆された。

《自己緩和不全》は、「強い不安や情動などを自分で調節・緩和する力が弱く、他者に調節・緩和してもらおうとする」(上地・宮下, 2005)特徴がある。

Kohut(1971)によれば、幼児期に子どもは、強さと平静さを備えた親を理想化し一体化・同一化することで、親の力を借りて不安や緊張を調整・緩和する。そして次第に、自分でそれを行う力、自己緩和能力が形成される。しかし、親への理想化体験が不十分で、このような過程が妨げられると、自己を心理的に安定させる力が脆弱となる。つまり、自ら不安や緊張を緩和する力が脆弱である《自己緩和不全》の場合、問題解決に向けて積極的に自ら対処しようとする事が出来ず、結果的に抑うつ感や不安感をストレス反応として表出するのではないかと考えられる。

《潜在的特権意識》について

《潜在的特権意識》の高さは〈不機嫌・怒り〉の高さと関連していることが示された。これより、《潜在的特権意識》が高い場合、ストレス反応は怒りやイライラとして表出しやすいことが示された。

Mario(1991)によれば、初期幼児期において、多くの子どもは「万能感」や「完全性」を有しており、この「万能感」や「完全性」が誇大自己となる。この時、誇大自己と自我はかなり融合しているが、自我が発達してくると人は限界を知り、誇大自己から自らを区別できるようになる。一方、

自己愛的人格障害に苦しむ人々は、現実吟味能力や基本的な自己感は無傷のまま保たれているにもかかわらず、誇大自己とある程度同一化してしまう。自らに完全性を求め、万能感に浸る誇大自己のファンタジーは、心地よいものであると同時に、困惑をもたらすものである。そのため、このような人々は、誇大空想によって賞賛やお世辞を希求する一方で、賞賛やお世辞を怖れるというアンビバレントな状態である。その理由は、彼らの賞賛への欲求には、恥が伴っているからである。ところが同時に、望んでいる賞賛やお世辞が得られないと、彼らは非常に侮辱されたように感じるのである (Mario, 1991 高石 2003)。そのため、本研究でも示唆されたように、不機嫌さや怒り、抑うつ感といったストレス反応を表出しやすいと考えられる。

次に、《潜在的特権意識》と対処方略との関連について、以下のことが示された。《潜在的特権意識》と、〔気晴らし〕の交互作用効果が認められ、〔気晴らし〕が行われる場合に、抑うつ感を高める可能性が示唆された。《潜在的特権意識》と〔計画立案〕の交互作用効果、《潜在的特権意識》と〔責任転嫁〕の交互作用効果が認められ、自ら次に向けて対策を考えたり、責任を他人のせいにしたりすると言った〔計画立案〕〔責任転嫁〕が行われない場合に、怒りや不機嫌さを高める可能性が示唆された。

〔計画立案〕が行われないと、怒りや不機嫌さを高めてしまう理由として、自己効力感や自己有能感が満たされないからではないかと考えられる。また、〔責任転嫁〕が行われないと、怒りや不機嫌さを高めてしまう理由として、自分は悪くないと言い逃れをし、責任を他の人へ押し付けることによって、自己評価や自尊心を維持していると考えられる。その一方で、〔気晴らし〕を行うと、抑うつ感を高めてしまう理由として、他者からの特別な配慮を期待しているにもかかわらず、その期待が他者から満たされないためであると考えられる。Mario (1991) によれば、誇大自己との同一化は、本当は自分が「卑小で醜い」のではないかと、という怖れに対する補償であると指摘している。そのため、〔気晴らし〕のように回避的な対処を行った場合、期待した他者からの配慮が得られないため、自己不全感が増し、抑うつ感を高めてしまうのではないかと考えられる。

《承認・賞賛過敏性》について

《承認・賞賛過敏性》の高さは〈無気力〉の高さと関連していることが示された。これより、《承認・賞賛過敏性》が高い場合、ストレス反応は無気力感として表出しやすいことが示された。

清水ら (2008) は、青年期における対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と心理的ストレス反応との関連を検討した。その結果、過敏特性優位型 (本研究における自己愛的脆弱性傾向) では、ストレス反応は、〈抑うつ・不安〉〈無気力〉の下位尺度で高く、全体的に精神的健康は低いことが示された。それに対して、〈不機嫌・怒り〉は平均的水準にあることから自他に対する攻撃的反応は相対的に少ないことが示唆された。この結果は、本研究の結果の〈無気力〉との関連と一致する。清水ら (2008) は、過敏特性優位型は羞恥感情に敏感で、目立った攻撃性はないもののストレス刺激に脆弱で、自分を肯定的にとらえられず、心理的ストレス状態に陥りやすい状態像が指摘されている。本研究においても、《承認・賞賛過敏性》は、他者評価に過敏であることから、様々な出来事に自信がなくなり、一人でいたい気分であるという無気力感で、ストレス反応を表出しやすいと考えられる。

次に、《承認・賞賛過敏性》と、[影響性の評価]の交互作用効果が認められ、他者からの評価に過敏であり、自我脅威場面が自分にとって重要であると高く評価することによって、抑うつ感や不安感を高める可能性が示唆された。

《承認・賞賛過敏性》は、「自分の発言や行動に対する承認・賞賛を強く求め、期待した承認・賞賛が得られないと自己評価が低下する」（上地・宮下，2005）という特徴がある。上地（2004）によれば、過敏型の人（本研究における《承認・賞賛過敏性》が高い人）が、非常に恐れるものは、自分に対する無関心および否定的な反応であるため、他者の評価に過敏になると言及している。自分の発言や行動が他者からどのように見られ、他者によってどのように受け取られているかを常に懸念し、少しでも拒絶的な反応が返ってくることを、非常に恐れる傾向がある。他者から肯定的に評価されたい、暖かく受け入れられたいと切望すると同時に、自分が無価値であると見抜かれるのではないかと、自分が欠点だと感じている部分が露見するのではないかと強い不安を感じる。これが、過敏型の人を抱える中核的な対人葛藤の基本的なパターンである（上地，2004）。このような葛藤を抱える、《承認・賞賛過敏性》の特徴がある人は、相手が自分を肯定するか否定するかを感じ取る敏感さを発達させていく。そのため、批判的な場면을重要であると考えるほど、脅威が増幅し、人間関係から退避して自分を傷つきから守ろうとし、無力感を高めてしまうのではないかと推察される。

総合考察

本研究の成果

本研究の結果、素因であると仮定した自己愛的脆弱性がストレス反応を高めることが示された。そして、自己愛的脆弱性の中でも、《自己顕示抑制》、《自己緩和不全》、《潜在的特権意識》、《承認・賞賛過敏性》サブタイプによって、関連のあるストレス反応に違いがあることが示された。また、4つのサブタイプによっては、ストレス反応を高めたり、抑制したりする対処方略が存在することが示された。以上のことから、自己愛的脆弱性のサブタイプを考慮し、対処方略を選択していくことが、ストレス反応を抑制する可能性を見出したことが本研究の成果である。

本研究の課題

本研究の課題は、自己愛的脆弱性傾向の高い人が、ストレスを軽減するプロセスを縦断的に調査できなかった点である。本研究の結果にも一部見られたように、本来ならばストレス反応を軽減するはずの対処方略を用いることで、反対にストレス反応を高めてしまう可能性があることが示唆された。このような現象の要因は様々考えられるが、その一つに対処方略の選択の失敗が考えられる。つまり、自己愛のサブタイプ別に適した対処方略が存在する可能性が考えられる。そのため、今後の課題として、自己愛的脆弱性の4つのサブタイプ別に、よりストレス反応を軽減する対処方略について検討を行う必要があると考えられる。

引用文献

Aiken, L. S. & West, S. G. 1991 Multiple regression: *Testing and interpreting interaction*. SAGE publication.
American Psychiatric Association 1980 Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 3rd ed.

Washington DC: Author.

- 相澤直樹 (2006). 自己愛に関する最近の研究動向(調査実証研究を中心に) 神戸大学発達科学部研究紀要, **14**, 109-123.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. 1996 Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33
- 遠田 諭 (2010). 2 つの型の自己愛の認知および価値観に関する探索的研究 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇, **10**, 113-124.
- 福井 敏 (1998). 誇大な自己—自己愛性障害— こころの科学, **82**, 75-80.
- Freud, S. (1914). *On narcissism : An introduction*. (フロイト, S. 懸田克躬・吉村博次訳 1969 ナルシシズム入門 フロイト著作集 5 性欲論・症例研究 人文書院 pp.109-132.)
- Gabbard, G. O. (1989). Two subtypes of narcissism personality disorder. Nulletin of the Menninger Clinic, **53**, 527-532.
- Gabbard, G. O. (1994). Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV version. Washington, DC: American Psychiatric Press.
- (ギャバード・G. 笹哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的精神医学—その臨床実践 [DSM-IV版] ③臨床編 : II 軸障害 岩崎学術出版社)
- Goldberg, D. & Williams, p. (1991). A user's guide to the general Health Questionnaire, London, NFER-NEL-SON, 49-50
- 伊藤 亮・村瀬聡美・金井篤子 (2011). 過敏性自己愛傾向が現代青年のふれ合い恐怖心性に及ぼす影響について—自己愛的脆弱性尺度を用いた検討 パーソナリティ研究, **19**, 181-190.
- 原田 新 (2008). 自己愛的自己評価プロセスに関する一考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **2**, 13-22.
- 原田 新 (2009). 自己愛の過敏性に関する一考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**, 19-28.
- 本田純久・柴田義貞・中根允文 (2001). GHQ-12 項目質問紙を用いた精神医学的障害のスクリーニング 厚生 の指標, **48**, 5-10.
- 市橋房夫 (1999). 強迫症状と自己愛性人格構造 精神科治療学, **14**, 835-842.
- 上地雄一郎・宮下一博 (編著) (2004). もろい青少年の心—自己愛の障害—発達臨床心理学的考察 北大路書房
- 上地雄一郎・宮下一博 (1992a). 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観-1- 岡山県立短期大学研究紀要, **37**, 107-117.
- 上地雄一郎・宮下一博 (1992b). 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観-2- 岡山県立短期大学研究紀要, **37**, 118-127.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成, パーソナリティ研究, **14**, 80-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊心

- 情の関連性 パーソナリティ研究, **17**, 280-291.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, **33**, 41-47
- 笠原 嘉 (1972). 正視恐怖・体臭恐怖 医学書院
- Kernberg, O. (1975). *Borderline conditions and Pathological Narcissism*. Jason Aronson, New York.
- Kohut,H. (1971). *The analysis of the self*. New York : International Universities Press.
(コフォート, H. 水野信義・笠原嘉訳 (1994). 自己の分析 みすず書房)
- Kohut,H. (1977). *The restoration of the self*. New York : International Universities Press.
(コフォート, H. 本城秀次・笠原嘉訳 (1995). 自己の修復 みすず書房)
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤豪 (2008). 自己愛人格傾向についての素因:ストレスモデルによる検討 パーソナリティ研究, **17**, 29-38.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. Springer Publishing Company, New York.
(リチャード・S・ラザルス, スーザン・フォルクマン 本明 寛・春木 豊・織田正美監訳 (1991). ストレスの心理学 実務教育出版)
- 前田和寛 (2008). 重回帰分析の応用的手法 - 交互作用項並びに統制変数を含む分析 - 比治山大学短期大学部紀要, **43**, 69-73.
- Metalsky, G. I., Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., Semmel, A., & Peterson, C. (1982). Attributional styles and life events in the classroom : Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 612-617.
- Mario Jacoby (1991). *Scham-Angst und Selbstwertgefühl Ihre Bedeutung in der Psychotherapie*
(マリオ・ヤコービ 高石浩一訳 (2003). 恥と自尊心 その起源から心理療法へ 新曜社)
- 中川泰淋・大坊郁夫 (1985). 日本語版 GHQ 精神健康調査票手引き 日本文化科学社, 17- 34.
- 中山留美子 (2008). 自己愛的自己調整プロセス—一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて— 教育学研究, **56**, 127-141.
- 中山留美子 (2011). 自己愛の誇大性と過敏性:構造と意味 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学 概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房 pp.54-69.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, **54**, 18-198.
- 小塩真司・中山留美子 (2007). 自己愛傾向が怒りと抑うつに及ぼす傾向(1)—調整変数としてのネガティブライフイベントの影響— パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **16**, 92-93.
- 大淵憲一 (2003). 満たされない自己愛—現代人の心理と対人葛藤— 精興社
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシ出版
- 小塩真司 (2011). 自己愛の心理学的研究の歴史 小塩真司・川崎直樹(編) 自己愛の心理学 概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房 2-21.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版

- Ronningstam, E. F. (2005). *Identifying and Understanding the Narcissistic Personality*. New York: Oxford University Press.
- 佐久間浩美・高橋浩之・竹鼻ゆかり・久野佳子 (2009). 高校生のストレス反応と自己管理スキルとの関連に関する検討 学校保健研究, **51**, 193-201.
- 相良麻里 (2006). 青年期における自己愛傾向の年齢差 パーソナリティ研究, **15**, 61-63.
- 清水健司・川渡邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16.
- Stolorow, R. D. (1975). Toward a functional of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, **56**, 179-185.
- 鈴木伸一・坂野雄二 (1998). 認知的評価測定尺度 (CARS) 作成の試み ヒューマンサイエンス リサーチ, **7**, 113-124.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1998). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, **4**, 22-29.
- 高野慶輔・丹野義彦 (2009). 抑うつと指摘自己意識の2側面に関する横断的研究 パーソナリティ研究, **17**, 261-269.
- 辻平治郎 (1998). 5因子性格検査の理論と実際 北大路書房
- Westen, D. (1990). The relations among narcissism, egocentrism, self-concept, and self-esteem: Experimental, clinical, and theoretical considerations. *Psychoanalysis and Contemporary Thought*, **13**, 183-239.